
タイムトラベル！！密室のサクリファイス

やってみよう会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムトラベル！！密室のサクリファイス

【Nコード】

N1499R

【作者名】

やってみよう会

【あらすじ】

おりやま 織山 はくい 佩亥はカメラマンである。

ある時は雪山、ある時は戦場、ある時はお祭り…。

でも、その中で友人を失ってしまいそれは自分のミスのせいだと思
い込む。

職業であるカメラマンを久しぶりに再開したのは、遙か未来で
た…。

ゲームの世界でBADENDを味わいながらもカメラを片手に必死
に地上へ目指す！！ 亀更新です…すいません…。

— 現在 —

（前書き）

あああああああ！！！！！！！！！！

やつつてもうたああああ！！！！！！

ノリで出してしまった！！

もし見たい人が出てきたら、覚悟決めます！！

ああ、懐かしい夏空。

俺は織山 おじやまはくい 佩亥フリーのカメラマンをやろうとして職業ミスって
ほぼニートになってかかっている。

変な名前なのは気にしないでくれ。

それで、最低限の運動やゲーム、アニメ以外何もしなかったため
久しぶりに近くの公園にまで来たのだが、ちょうどいい具合の夕空
が映っていた。

「今は夏で夕方……。」

俺はすぐにカメラを取り出す。このきれいな夕焼けをフィルム・
・メモリースティックに焼き付けようとする。

電源を付けると画面にいろんな写真の画像が出て来る。

そして、写真を撮る準備が出来た。

「ようし！いい写真を撮るぞう！」

そうしてシャッターをきる。

カシャッ

「ん？」

何か近くで騒がしい声がする。

……ああ、お祭りだったな……。

懐かしい。本当に懐かしい。昔ははしゃぎまわったものだもんな……。

「……久しぶりに、行ってみよつか！」

そう言っ て歩き出した時、

パサッ

「おっとと——」

写真が一枚地面に落ちた。

そこには俺と他の人たち（外国人）が写っていた。そう、こいつらは外国の友人たちだ。

一緒に雪山で撮った写真。俺は引っ張られて今にもこけそうだ。

って時にジョニスの野郎がシャッター切りやがってさ……。変な格好で写ってしまったんだ……。

……あいつら元気にやってんのかな？

結構心配になる。俺がこんなありさまだから……。

もうやめよう。せつかくのお祭りなんだ、楽しむと同時に写真を撮って行こう！

~~~~~

ガヤガヤガヤ……

「懐かしいな、おつ水風船取りもあるじゃん！  
うわ、懐かしいよ！」

独り言が多くなってきているが気にしないでくれ。

にしても久しぶりだ。このお祭りにはほとんど来た覚えがないほどだ。

ふと時間が気になり腕時計を見る。

8  
:  
5  
1

「ああ！大変だ！もうすぐ始まってしまう！」

俺は急いでお気に入りスポットへ行く。

六十八階段を上り、お地藏さんを目印に右に行き、草むらをかき分ける――

草で覆われた神社をゴールにし、この街全体が見れる、開けた野原で大の字になる。

8  
:  
5  
9

9:00

時間が変わった瞬間にポツヒュー……という音が遠くから聞こえて、少し間をおいて――

ドオオオー！！！！！！

綺麗な赤、黄、青、緑の華が夜空に浮かんた。そう、花火である。すかさずシャッターをきる。

「うん、いい写真が撮れたぞ！」

俺はそこで終わるまで写真を撮り続けた。



あの五人の中で好きな人はクロエかな・・・？  
でも、ミキも結構好きです(笑)

順番に言っと、

クロエ

ミキ

オルガ

イトカ

アスナ、かな？

皆さんはどのキャラクターが一番好きですか？  
それでは！

時系列的に「ZERO」の初めからやってみようかな?と…。

結構知つとかなきゃつらいと思います……(・・・)(

気がつくと視界が白く染まっていた。  
すぐに黒く染まって変な機械の音がした。

「こいつ、生きていたのか……。  
一昔前の失敗作だと思っていたが…。」

なんて声が聞こえてきたため強制的に目を開ける。  
そこに立っていたのは動きやすそうな服を着ていて、茶色い汚れた布で顔を、髪を隠している大人の女性がそこにいた。

「ん？まさか！起動していたのか！？」  
「というよりあなたは誰？ここはどこ？」

なんか見たことある女性とこれまたなんか見たことある研究施設  
っぽいところに俺がいる。しかも、寝ていたところは巨大な何かの  
装置だった。

……あれ？結構落ち着いてんな、俺。

「あ、ああ、私は『クロエ』だ。  
君は『ファウンデーション』に聞き覚えは？」

ファ、ファウンデーション！？！？そんなわけがない！！ファウン  
デーションはゲーム上の仮想世界であって……。などなど、色々

ショック？を受けていると、

「聞き覚えがないのか？」

ふむ、本当に過去の人間をタイムトラベル時限召喚するとは…。」

聞き慣れない言葉が聞こえた。た、タイムトラベル！？設定では未来ではあったが…まさか、管理局でそんなこともしていたのか…。

そして気になったのだが、何故か十六、七くらいの頃の身長に縮んでいた。それと、何故か制服も着ていてカメラのセットや大きなカバンがあった……。全部俺だ…。

もう、佩亥は考えるのはやめた。

始まってしまったのだから仕方ない…。そう思うことで気持ちを落ち着かせている。

「お前は過去で生きていた、そうだろう？」

「はい。こんな装置、見たことがないですからね。」

歩きながら俺のいた世界——過去——の話を話す。

そうしていつの間にかイトカの眠っている装置がある部屋にたどりついた。

そこは、まるで墓地だった。うす暗く、静かだ。そして、いくつもの棺が整然と並べられている。

俺がいる時系列は『ZERO』あたりの最初、イトカの目覚めだ

と思う…。

「これはコールドスリ・プ装置というんだ。  
ふう、とうとう見つけたよ。」

「この子は…？」

そこには少女——イトカが凍っていた。

すると『元クロエ』が装置の脇にあるコンソールへと手を伸ばす。

「今からお前を自由にしてやろう。」

「…え？」

もの凄い早さでキーを打ち込んでいた…。赤、青、黄に色を変え、最後に分かったのだらう、「WMBHF」と打ち込んだ。

「この程度のセキュリティか。」

おお！かっこいい！と感動している間にふたが完全に跳ね上がった。イトカはまだ眠ってる。

すると『元クロエ』が手に持った小さな機械をイトカの首筋にそつと当てる。

「おお…！すごい…！！！」

つつい言葉に出してしまった。青白かった肌が徐々に、徐々に、わずかな赤みが差していったからだ。

「おまえが、イトカだね？」

「誰？」

ふと声が聞こえたので我に返る。どうやらイトカが目覚めるまでボーっとしてたらしい。

「そこから出たいか？」

イトカは少し考えて、

「ううん。ここから出たって、いいことなんかないもの。」

「そうか？」

「いやな夢を見なきゃいけなくなるもの。」

「……。」

そういえば、イトカは嫌な夢を毎回見るんだっけ？

……それはそれで可哀そうだな……。

「それに、私が起こされるのは、みんなにひどいことをされる時だけ。」

「何をされるんだ？」

「注射とか、お薬とか……。」

医局の奴らは人でなしだな！！

そう思っているうちに

「目覚めたな。」

「え？」

我にもどる。すると、『元クロエ』がフードを脱ぎ捨てる。流れ落ちる髪は白色？いや、銀色だ。

暗い目は青色だと思う。そして色素の薄い、白い肌。

…そうだ、名前を思い出した！『オレンジ』だ…！  
ことの発端として最初にイコンパワフル活用した人だ……！  
と思考をフルに使っていると、

「あ…。

いや…！」

と聞こえ、不意に足場が、頭上が、目の前が白い霞に囲まれて、  
嫌な浮遊感？を感じた。

まさか！？イトカの夢の中…？

そこまで答えを出した時、周囲を覆っていた霞のようなものが、  
徐々に晴れてゆき――

「がつ…！」

地面に落ちた。

体を起こし周囲を見回す。…ここは…！アスナのパパさんが働いて  
いたとこだ！……なんか、本当にファウンデーションに来たんだ  
な、つと改めて実感していた。

そこは、複雑な機械やパイプがひしめく、工場地帯のような広い  
空間だ。

そして、佩亥の記憶道理、けたたましい警報音がなりひびいてた。  
すると、

『総員は直ちに避難！現場は放棄する！繰り返す、総員は――

――』

おお、恐ろしいことになってんだな…！

なんて思ってたカメラの準備をしている。佩亥は見たことのないよ

うなものを片っ端から写真に収めておきたい派だ。

「あなた…？」

と、聞かれたため、俺の事か？と振り向く。もちろんカメラは構えて。が、しかし、イトカの「あなた…？」は俺に向けてではなかった。

…オレンジさん、あんた、俺の存在忘れてるでしょ？と聞きたくなったが、今はシリアスなムードであるためふざけられない。

「これが、お前の夢か。」

「う、うん…。」

今の内にイトカと話せば物語が色々変わると思い、顔を見せないように他のとこの写真を撮る。

今、この『オレンジ』さんが話したのはなぜ『アイコンプロジェクト』が凍結したか、なぜここで事故が起こったのか。その中心が『イトカ』ということについてだ。

たしか、イトカは『世界を書きかえる』能力——涼宮ハ○ヒ的な能力——を持ってたんだっけ…。んで、それが——  
——アイコン。

その膨大な力を利用しようと医局、管理局が協力し合い、イトカを造った——これがいわゆるアイコンプロジェクト。そして過去も未来も「書きかえ」られる力を手にして、事故が起こった。

それがこの事故。そしてプロジェクトは凍結ってどこかな？

「なぜだ？自由がほしくないのか？」

「もう私、恐いのはいや。」

ん？あれ？そういえばこの展開、どう見ても『ZERO』の最悪

なパターンじゃね？いきなり、バッドエンドっすか……！でも、始まりがあれだったから…ああ、そうか。俺、五人が揃う少し前にいいのか！

そうじゃん！ここから始まってここではほぼ終わっていたということじゃないか！

とその時、

「地上というものを知っているか？」

「地上？」

…俺、知ってますよ？なんて言えない。もの凄いシリアスだから。少し勇気が足りていなかった。ああ、心の中も十六ぐらいになったか…。と懐かしさを感じていた。

「そこは、緑の植物が生い茂り、

空はどこまでも高く青く、

空気は無限に肺に流れ込み――

太陽の暖かな光が降り注ぎ、

頬を撫でる風は芳しく、

時には恵みの雨が降る。

それが地上だ。」

あーうん、あってるっちゃあってるけど…。砂漠化してるところもあるし、ツンデレな雨も降る。合って無いところもあるよ。なんて言えない。もの（ry

「イメージを送ろう。」

あ、また話を聞いていなかった。オレンジが何か言ったのでよく見ると、その手には医療用スキヤナが握られていた。

「いや！」

——ふふ、痛いことはしないから流れに沿って——

と、百合的妄想を一瞬したら小石が飛んできた。おお、あぶねえ

…！

「どうした、怖いものではない。」

…それでもイトカに気にせず話せるオレンジさんは凄いと思う。

「いやよっ、実験はもういや！」

ずいぶん酷いことしていたようだ、医局と管理局は…。俺も巻き

込んで何が楽しいんだ…！

佩<sup>はく</sup>亥の怒りがふつつつと込みあがる。

…それでも、カメラで周りの撮影をする佩亥も十分凄かった。

「いやよっ！みんな、怖い！」

——…！！来る！！

そう知ってたため身構える。

「みんな、消えて——————！！！！」

いきなり視界がぐにやりと歪んだそして、

全ては真っ白になった。

ここは……？

意識がもうろうつとしている中、よく分からない場所にいた。

この白い空間の中、黒い影を見ることが出来た。

その瞬間佩亥はぐいの目は大きく見開いた。

「なんで修頭しゅうとうが居る……！！お前はあの戦場で死んだんじゃっ……！！」

「ごめんな……。佩亥……。」

「修頭……！お前は謝んなくていい！俺が悪いんだから！だから」「アイコン」……？」

「お前をアイコンにしてしまった……。本当に、ごめんな……。」

「！？」

こいつは何を言ってるんだ？俺がアイコンに??

そう考えている内に修頭と呼ばれた黒い影が消えてゆく。ゆっく  
りとだが、確実に。

「修頭！俺はあきらめない！アイコンの力を使って必ずお前を迎えに  
行く……！」

黒い影は佩亥はぐいとは違う方向に歩き出したがふと佩亥の方に振りか  
える。

「それまで首洗って待つとけよな……！！」

「……………それはケンカの決め言葉だ。」

そうツツコミ、修頭は歩きながら手を振り消えていった。

佩亥は急に眠気を感じ、そのまま眠りに付いた……………。

— T o b e c o n t i n u e d . —

今回ののは『P U K K A   R U M B A - 「密室のサクリファイス」攻略』と、

『あにおたゲーマーの溜息』さん達を参考に話を進めていこうかな？と思っています。

ここの攻略サイトはとてもお世話になりました！ありがとうございました！

それでは！

誤文発見！修正完了

—— 出会い

—— (前書き)

か、書けた~~~~~！

今回は—— 血—— からです。

第三話、どうぞ！

「……に……が……るわ!……」

…ん?ここは?おお…!伝説の巨大プリンがなぜここに!?

「……じょ…ぶ?……わ!」

「あはは、そんなに食べられないよ」……」

「起きなさい」

「んお!?!敵襲か!?!」

「違うわよ……じゃなくて、大丈夫?ここで何してたの?」

目を覚ますとそこには美人さんが居ました…。?

段々思考が整い、今の状況を調べて見る。

鞆が一つ、カメラのセットは一式揃ってしっかり収まっている。

肝心のカメラは首から下げられている。学生服もしっかり着ているし、あの頃の戦場でいただいた拳銃が一丁と……。

……え!?!なんであんの?

「ちよと?無視しないでよ。」

「んあ!わ、悪い……」

「隔壁の向こう側に人が居るの」

「そこに行くのを手伝ってほしい、と?」

「ええ。」

今話してるこの美人な黒髪少女は確か――

「あ、そうだ。自己紹介しよう」

「え？ま、まあいいわ。」

私はミキよ。」

「へえ、道理で日系人な訳なのか…。」

ま、いつか。俺はハクイ。よろしく」

――ミキだ。

ん？あれ？他のメンバーが居ない…？

そうか！今アスナは被曝してるんだった！

「で？この隔壁の向こうへどうやって行くんだ？」

「……………」

どうやらまだ考えている最中らしい…。

ふと、このステージを思い出す。

確かまずは――

「ミキ、その植木をどけてくれないか？」

「え？ええ。」

俺達から見て右の植木をどけ、なんか変な床を見つける。

「下に空洞がある？」

「…そうっばいな…向こうに繋がってるかもしれない」

そこを開けると穴があった。

でも、降りれそうにない…。

…あ、そつか。この穴に近い引き戸を開けて…

「その引き戸を開けてくれ。何か使えそうなものがあるか調べてくれ。」

「分かったわ。…消火用のホースがあつたわ！」

「よし！これで降りれる！」

早速穴から降りる。…見——

「見ようとか思ってたら殺すから」

「ハハハ、ソナノオモツテルワケナイデスヨ」

「……はあ。」

溜息つかれた…。

っと降りれたな。じゃあアイテムを回収すつか。

降りてすぐのところ、左に鉄の板つと——

「何でそれが必要なの？」

「こういう古い場所はなんかが壊れてるって決まってるんだ。

それに地震だってあるし。役に立ちそうだったら持っていくってのは常識だ。うん。」

「……そうかもね。」

…ふい〜〜、適当に言っただけと怪しまれずに済んだ…。

もし、「この後使うのさ（キリッ）」なんてやって当たってたら怪しく思うもんな…。

あぶね〜……。

んで次はつと…

ハクイは奥に進む。すると上に続く梯子があつた。

が、その前に右つ側にあるバネを取って…。

「この梯子、登れそうね…。

見ないでよ？」

「ハイ。命に代えても…！」

梯子に掴み上へ上へと登った。

「そこにいる？」

「ええ！」

あ、思い出した。オルガだったと思う。

「この蓋そつちから開けられない？」

「…ごめんなさい。こちら側には取っ手が無いの。」

「…さっき拾ってたやつ、貸して？」

「ああ。」

さっき拾ったやつを渡す。

すると鉄の板を使い、それが金具にしっかりとハマった。

そしてバネも使って、金具と鉄の板の穴にはめた。

おお、スムーズ！

そしてその金具達を動かし、マンホール重い金属性の蓋が開く。

すると――

長い白髪の少女が手を差し伸べていた。

…眼鏡をかけ、にっこりしている…！この雰囲気はまさしく委員長  
長キヤラだ…！

んなあほな事考えてたら、

「つかまって！」

と聞こえた。生憎、ミキが上にいたため一瞬しか見れなかったが…。

って言うか早く行って下さいミキさん！

「どうしたの？さあ早くつかまって」

「ひとりで、上げれるから」

「え？」

ツンツンした感じでミキは一人で這いあがった。  
…俺も上がるか。

「ええっと…。」

「私はミキ。」

ミキが一言自己紹介をすませる。じゃ、俺も、

「俺は佩亥<sup>ハクイ</sup>だ、よろしく。」

「私はオルガ。よかった、誰かに出会えて。もう誰もいないと思っ  
たわ。」

「私も——！向こうにも、一人いるの。」  
「え？」

今一瞬忘れてたんだろ、ミキがはっと思いだした。

「病気みたいで…意識が戻らなくて。」

「病氣？」

「それ、本当か？」

知らんぷりをしなくちゃいけないので、初めて知ったかのようにする。

いや、知ってたらミキに怪しがられるからな。

「分からないけど……だから私、医療キットを探していて……」

ミキはその、『アナスタシア』の状態を話した。  
で、思ったんだけど、俺力ヤの外だぞ？あ、俺関係ないっすか。  
すいません。

「簡易的な医療キットなら、ここに持っているわ。」

「え！？ほんと！？」

「助かるのか？」

「とにかく、診てみないと分からないけれど……そこに案内して。」

俺たちは来た道に戻る。するとピンク色の髪の毛の美少女が——！！！！！！血まみれでした　つてえええええええええええ！？！？？

なんで！？……………あ、そうか。この血は――

「使い方知ってるの？」

ふと、ミキの感心したような声が聞こえ、そっちを見ると、医療スキャナを操るオルガのよどみない手つきが見えた。

と同時にオルガの手つきも凄いなとも思った。あと、現在の（といつても過去の方）技術じゃそんなのあつたわけ？とどうでもいいこ

を思いつくあたり、俺は今何もできないのだ。  
未来の話なんだと再度思う。

「父が医者だから、使い方が分かるだけ。」  
「それでも凄いと思う。」

と言ったときにオルガの冷静な様子がふと揺らいだ。

「どうかしたか？」

「……短期照射の痕跡があるの。」

「え？」

「これは…被曝してるわ。」

「…ひばく？」

やっぱりそうか…。ゲームどうりだ。

「だが、こんなところで被曝するなんてことはあり得るのか？？」  
「ここの放射線レベルは正常よ？被曝したのは、ここではないわ。  
だからありえないと思うけれど？だいたい、ここは居住ブロックよ  
？」

「んじゃあ、どこでそんな…？」

「このあたりの居住ブロックにはそんな危険な場所はないし…  
今回の事故と何か関係があるのかしら。」

当たらずとも、とうからずってな感じかな？

この被曝は確かあの場所での出来事だもんな…。

「しかも、被曝後に移動したとなると…かなり時間が経っているってことね。」

眉間にしわを寄せるオルガ。

少し声を震わせながらミキが聞く。

「助かるの？」

「そのうち急変するはず。多分、あと2・3時間後くらい。」

「そしたらもう……助からないわ。」

俺らは、アスナを助けるために考え始めた

— T o b e c o n t i n u e d . —

—— 出会い —— (後書き)

オルガの登場です!!

この五人の中で一番まともな子でしたが、僕的にはやっぱりクロエですね。

今回はネタばれしまくっていますんで嫌いなお方はここでもどってくださいね

次回もネタばれするかもしれませんからお気を付けて下さい  
( ^ | ^ ; )

次回、—— 父親 —— からです!じゃね!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1499r/>

---

タイムトラベル！！密室のサクリファイス

2011年10月7日15時03分発行